

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年  
1月号

通巻545号  
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年1月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷製  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



フクジュソウ



オオミスミンソウ  
(佐渡のユキワリソウ)



シロバナカタクリ



4月15日新保祭り、西方集落の鬼太鼓(オンデコ)の門付け。佐渡島内で120組程の鬼太鼓はそれぞれ型が違い、年中どこかでお祭りがある



冬の日本海の夕日

「佐渡に暮らして」 平田弘之さん撮影(文・6頁)



妙照寺の祖師堂の床下を探検中の法主様

平成4(1992)年1月23日 月次祭法話より

## 『やわらぎの黙示』を出版して思うこと

法主 矢追日聖 (満80歳)

### 傘寿を記念しての出版

今日は大寒と言われる時季ですね。風も冷たいし、これも寒の値打ちですけれども、最近是非常に暖かくなりました。私がこの山に入ったのは、昭和二十二年ですけれども、その頃はあちらこちらに氷柱が軒から下がっていました。それが、もう見かけなくなりました。

おかげさんで私も八十を越えまして八十一歳に入っております。八十といったら「お爺」やと思っていたけれども、八十になってもうたら、そんなにお爺と思わへん。まあ志は変わらへんからかも知りませぬけれども。

昔は六十になるとええお爺でした。私は農村で生まれていますから、六十になつてきたら顔の皺深くなつて黒い顔していました。みんな田畑の仕事をしてこられたんです。けれども、最近の六十というと皆若々しい。ここに居る人もたぶん六十位の人居ると思うけれども、みんな若い顔しています。

明治四十四年に私は生まれているんで、昨年の十二月二十三日が八十歳ということになるやけれども、今度それを記念して『やわらぎの黙示』という本を出版してくれました。死んだ後で出版するのが普通やけれども、早いところやってくれたと思うんですよ。

柴地(則之)さんが、十年前位からいつも言うてくれとつたんやけれども、「まだ死なへんから」って返事しとつた。

言うてくれとつた柴地さんが、何の因果か知らんけれども先に逝ってしまいました。年寄りが残って若い者が先に逝ってしまったけれど、それもまた世の中の常やからしかたないと思っております。

皆さん方はもう本を読んでもらっていると思うんですけども、私は生きてるんでね、また色々話し合うことも出来ると思います。

本を出してもらって、みんなが読んでいると思うと、何となしこぼれぬ気がするんです。私が死んだ後やったら、何を考えてもらってもいいんやけれどもね。

日本の宗教というのは現世利益だと思ってる人が多いんです。あの神さん拝んだらご利益くれるとか、あそこに拝みに行ったら入学試験も通るとか、得手勝手なことばかりで神さん利用するような考え方が多いですよ。だから今回編集した石垣(雅設)さんも色々考えてくれて、第一回目に出すには大倭の基本的なものにしてもらったらいいと言っているので、割合気遣いじみたことが出ております。

大倭のこと知らない人が読んだら、かなり頭の中のぼつとんのやな、きつと気違いやなと思うところが随分出ていると思うんです。

## 「日聖」といふ名前の名付け親

「日聖」という名前は、私が好んでつけたんでもないけれども、今は戸籍の名前になっております。昭和二十一年に宗教学人にした時に、名前を変えたんですけれども、霊界の人と現界の私とが、お互い交流していくには霊界の名前が必要らしい。それで聖徳太子が「日聖」という名前をつけてくれています。千三百年以上前の人やのに、な

んでその人が名前つけてんのやと、普通はそう思うわね。

私のことは、霊界では日聖という名前で通っていて、私を日聖と呼んでくれます。そして、この本を出してくれて現界の人も、ああ奈良に矢追日聖という人がいるんやなと言ってくれるんやろうと思うんです。

私なりに思うに、人の名前の中で最高やと思う。これは自惚れかもしれないけれども。日の聖という名前つけてる現界人は、世界中にもないと思う。

日蓮宗の坊さんの名前、日のついた坊さん随分おります。大本山の大管長とか、偉い人なんかには、日なんとかという名前がついています。けれども日聖というのは一人もおらんと思います。日蓮宗ではその名前は禁物やと思うんです。ところが私は日蓮宗関係者でもないから、戸籍でも通っているんやけれどもね。

文句言ってくる人は誰もおらんけれども、何とまあこんな自惚れた名前をよくつけてるもんやなあと思います。しかし宗教学人にした時に、霊界の人がこれを現界の本名にせえと言われるから、しかたなしに戸籍名を変えました。

霊の世界では色んな人格霊が随分いて、私と交流しています。その交流の中で、増上慢の心を持つたらいかんと教えてくれます。霊界の人はそう言うんやけれども、私自身が自分の名前見たら、やっぱりえらい増上慢な気がします。自分の心の中にはそんな矛盾がいつもあって、今回の本でもそうですが、「矢追日聖」という名前を見る度に、増上慢な奴やと思われなかと考えるんです。

## 心安く教えてくれる光明皇后

光明皇后さんが出てきて、心安く私の女房役を

してくれています。生きてる人やったら問題やけれども、もう千二百年から昔に亡くなってるんです。嫁さんみたいな形で色々言うてきても、誰もやきもちやく人もおらんし、問題にならんからいいんやけれどもね。ここに置いてくれ言わはるから、御霊をお祀りしてある。

こんなこと言うと、「昔の偉い人をつかまえて」と思うかもしれないけれども、光明皇后さんが出てきても私の立場からすると対等なんです。色んなこと教えてくれるから女房みたいなもんです。これは霊界の話ですけれども。

八十になっても、あんな若いお姫さんとかか話したりしたら気持ちええわな。光明皇后さんは六十位まで生きとつたのかも知らんけれども、出てくる時には自分の一生の中で、一番若くて一番綺麗な相で出てきます。

霊界には生まれて死ぬまでの姿形は残っているんです。その中でその時に一番必要とする姿で出てくる。だから霊界で出てくる光明皇后さんの顔は二十歳の別嬪です。観音さんみたいな綺麗な顔して出てきはる。霊界というのは、心さえ美しかったら綺麗な顔になって出てくる。だから生きている時が一番大事なんです。

生きている時に別嬪でも、心が悪かったら夜叉みたいな顔になって出てくる。霊界というところはそういうところなんです。

## 交流する場としての大倭

霊界の中心が大倭ということにあるんです。ここは霊界の中心なんです。この土地そのものじゃなくして、この地区が霊界の人達と現界の人達との接点で、交流する仲人役が私なんです。私はそういう意味で生まれさせてもらっている。



我々が平和に、現世楽土のような社会にしていくなければ、現界の人達がまず浄化して平和にならなければ、霊界の人間は平和にならない。そういうような因果関係なんです。

霊界の人達は、よく出来ている人もいれば、苦しんでいる人も沢山いるし、邪霊になっているものもある。人間だけじゃないですよ、動物にいたるまで霊界にはみんな存在している。その霊界の人達を浄化していくのが私のお役目です。

今これだけの人達が来ていますが、あんだ達の親、そのまた親、その親と、何億という先祖さん達の霊魂が一人一人の血液の中、肉体の中に入っているわけなんです。自分を精神的に浄化していく、人間的に悟っていくという心が、あんだ達の先祖さんの方も浄化していく。その心が残っていくと、霊界の方はそれで美しく浄化されていく。結局、裏と表という問題ですから。

霊界の人と現界の人達が交流することによって霊界は平和になり、現界も平和になるようにという意味で祭典儀式をやっているんです。

## ご利益を求めない信仰

自然神は別ですが、例えば素戔嗚尊すさのおのぞとさんとか、天照大神というような名前をつけ、高い所にいる神さんと思っているか知らんけれど、こんなのはみんな身近なんです。何もそんな偉い神さんいません。我々が見て偉いと思うだけであって、ただ古い人というだけです。

我々と直接色々な交流をしていくのは全部人格霊です。人格神というのは、この地球の上に肉体をもって一回生まれ来て、亡くなって霊界にいる人のことです。

ただ我々人間だけが偉いと思ったら大間違い。

例えば狐一匹でもずっと霊界で修行しとったら、他の偉い神さんより力を持っている狐もいますよ。狸もいますし馬もいる。いろんなのがいるんです。畜生霊が人間を指導している場合も随分あります。

そんな畜生霊の場合であれば、人間に拜んでもらったり祀ってもらったら、喜んで商売繁盛させるようなことはある程度出来ますし、病気を治すことも出来ます。伏見稲荷に行ったら、あそこには畜生霊ばかりですよ。そんなこと言うと、あそここの神主さんに怒られるけど本当はそうなんです。下等な畜生霊は、神さんみたいに祀ってやって、人間が何かお供えて拜んでやったら、言うことをよく聞いてくれます。日本全国に、拜み屋さんというのがたくさんいるけれども、指示をしている神さんには畜生霊が多いんです。これも下等霊やからです。

そういう場合もあるけれども、我々が神さんだと思つて祀つてるような人格神では、言うことを聞いてくれません。我々肉体持つてる人間と霊界にいる人格霊とが、お互いに拜み合う心で交流していくところに大切なものがあるんです。それをお互いに心得てもらったら一番いい。病氣治してくれとか、或いは商売繁盛させてくれとか、そんなことで拜むなら、霊界の人は横向くと思えますよ。

それよりも人間として修養せよとか言われます。ところが日本人は難儀なことに、ご利益くれるような低級な動物霊を信仰してる人が大部分なんです。だから大倭では、いつも「拜んでもご利益無いよ」「ごんだけお賽銭あげたかて、学校入学でけへんで」と言つて笑うんやけれどもね。

人間として向上していくようにすると霊界の人もだんだん浄化して、向上していくと社会の全体が平和になっていく。目に見えないけれども、

霊界と現界の両方が浄化していく。これも一つの平和運動であると私は言いたいです。

## お互いに仲良くつづいて

今回うちで出した本も、気違いやと思わんと、一応素直に読んでおいて欲しいんです。あれは矢追日聖の世界やから、あんだ達は理解出来ないことがあつても素直に読んでほしいと思う。私に気違いじみていることは、自分で認める。あんだ達が気違いと言わないでも自分で分かっているんです。

命のある間は、この気違いじみた生き方をしましけれども、広い世間に沢山いる霊的能力のある方、或いは霊格者があの本を読んだ時、まあ真面目な人もいるんやなと言ってくれるだろうと私は思います。この人やつたら日聖という名前がいいんやなと分かってくれる人もあると私は思っています。私が亡くなった後に読んでもらつて、こんな人間が昔おつたんやなと思つてくれたら、それだけでもありがたいと思うんですよ。

あと五回くらい、このような本を出してくれると思います。その中にはお医者でも治らんような病氣が治つたとか、ややこしい霊界の話が、かなり出てくると思う。

私が生きている間は、あんだ達と心安くお付き合いしたいと思うんです。こうやって来てもらつたら嬉しいし、また旅行にも一緒にいきたいし、毎月の文化行事も一緒に遊びに行きたいし、

何でもないんやけれども、こういう使命をもって生まれて来ているというだけのことです。飯喰つて小便して糞こいてるし、寝てまた起きて、あんだ達と同じことを、私自身もしているんやから、何も偉くないんですよ。だから心安うにお付き合



『山が学校だった』

谷達雄氏の長年の生活経験に裏付けられた「生活の技と知識と知恵」、「自然の不思議に驚嘆する喜び」、そして「大自然への畏敬と敬虔な心」、これらを次世代へ伝えるために、様々なフィールドワークを

山

明けてお芽出とうございませう。年の始めにあたり、謹んで大自然の大慈悲に感謝し、全ての命あるものに平和と喜びがありますように、また私たちの生活と行いとを導く英知がありますように、と祈りながら、昨秋の文化講演会の報告をさせていただきます。

講師の辻谷達雄氏は、吉野の川上村にある「森と水の源流館」の名誉館長で、今年83歳。山仕事60年以上のキャリアを持つ《山の達人》です。その

奈良市川上町 井手 泉

平成27年11月8日 大倭会文化講演会「山の自然とともにいきて」報告

いたしたいと思う。そうするとあんだ達の関係しているご先祖さんも、それによってまた浄化されていくと私は思うんです。みんな仲良よしとしましうや。仲間になってほしい。それが大事です。

大倭会の信者になつたらあきません。まあ一応宗教法人になっていすけれど、宗教法人みないなどうでもいいんやし、大倭会の教団みたいなもん解散しても、そんなもんは問題じゃない。それより一人一人、霊界の人と現界のあんだ達と仲

良くしてくれる人間を作つていきたいというのが私の本心です。

大倭会の信者を目指そうとか、大倭教を大きくしようとか、そんなこと考えてもらつたら困る。それよりも何億という、霊界にいる人達を浄化させていく。自分の心が浄化することによって霊界人も浄化していくのだという、そんな信念でお互いに信仰していきたいと思ひます。

(文責・編集部)

柱としながら、講演や色々なイベントや執筆など、多岐にわたる活動に取り組み精力的に活躍されています。

さて今回の講演で話された具体的な内容は、忘れっぽい私の頭ではおぼろげにしか思ひ出せませんでした。しかし前に述べた次世代に伝えるべき内容の話でしたので、私は終始共感しながら拝聴して

きました。会場のみならず、講師の朗らかで気さくな人柄と、明晰で分かりやすい話し方に引きつけられたと思ひます。吉野川源流域にある三之公の原生林「源流の森」の話に始まり、原生林と人工林との本質的な違いや、その保全方法の根本的相違などを分かり易く説明されました。

私も、原生の森が成立するには何百年もかかり、未知の生きもので複雑に構成され相互につながりながら循環する、巨大なシステムである原生林は決して伐採してはならないこと、逆に人工林は適宜手入れをしないと荒廃すること、そしてこれらの自然の法則に逆らえば必ずバチが当たることなどを改めて痛感させられました。

講演の後の質疑応答でも、その一つひとつにけれんのない応答をして頂き、沢山のことを学ぶことができて、本当に楽しい講演会でした。

ただ残念だったのは、辻谷氏のモットーでもあたる「百聞は一見に如かず」「身体で覚えたことは忘れない」という道理からすれば、言葉だけの講演では伝わらない大事なものが欠けていたはずです。ですから、ぜひ現地での体験をおすすめします。

とりわけ私が思うのは、水源地の森で万物万霊の発信するメッセージを虚心坦懐に受容してほしいことです。そうすれば、現代人のほとんどが失ってしまった自然の声に共振する純粹な感性、つまり自然の神秘や美しさへの驚嘆の喜びを取り戻し、眼前の全ての存在が、互いにつながつた兄弟であり、自分自身であることに気づくかもしれません。

(拍手・合掌)

自分の身体という原生林

大阪府枚方市 別所 りか

私は都会生まれの都会育ちで、原生林は見たことも、また入った事も無い。今は行政で働きながら自力整体を教えている。

昭和38年4月1日生まれ。当時は、三八豪雪で真冬並に雪が降っていて、おしめが外に干せず、家の中でストーブを焚いて乾かしていたので、なかなか乾かなかつたらしい。勿論、紙おむつなんてない時代なので、晒しのおしめだったらしい。

毎年の4月1日の天候は面白い。真冬並に寒く雪が降ると思ったら、真夏の様に暑い時もあり、ポロシャツ1枚で良い感じの日も有るのだから、その時になってみないと分からないのだ。

自然というものは、そういうものだと思はれてはいた。幸い、母の実家が奈良の農家なので、小学校から中学までは、夏休みや冬休み春休みといった休みは、祖父母の家に滞在し田舎暮らし

しを体験した。井戸水で顔を洗い、祖父の作るスイカを井戸に浸し冷たくしておやつに食べたり、家族が食べる為の畑があり、野菜は常に取れたての新鮮なものが食べられた。今、考えるとても警沢でロハスな生活だ。

そんな中でも自然は人間にはどうしようもない事が起きる。夏の干魘。水ききんで干上がり、田畑が駄目になり、溜め池は有るが、隣村と水の取り合いになり、祖父は農協の事務所に詰めたまま何日間も雨が降るまで帰れない。

でも雨は必ず降る。祖父母の家は神道だ。母に聞いたら、神様にお願したら雨が降ると言う。何かしら儀式の様な事をすると必ず雨は降る。子供ながらに凄く不思議でならなかった。やはり、田畑にも精霊や神が居て、人間が搾取し過ぎたり、欲を出して儲けようとし過ぎたりするとそうなるのかなあと思う。

そういう事を横で見て育って来た。食べるものも、生きているか死んでいるか解るのも、この時の体験が大きい。おやつにキャラメルやチョコレートは出てこないが、祖父が作ったスイカが大きく立派でたまらなく甘くて美味しかったのは、40年以上経った今でも覚えている。イチゴはハウス栽培で今は叔父が受け継いでいるが、スイカは難しくてもう作っていない。火傷をしたら、植えているアロエをはっていた。感覚が優れているのでどんな時に何をしたら良いのかは、田舎の人は鋭いし都会の人より解っている。山の中ではないが貴重な田舎暮らしの体験が今の私を作っている。原生林の山も一度入ってみたいと思う。山は人を癒してくれるお医者様のような。都会で緑もなく、機械に囲まれて毎日あくせく働く者にとって、バランスを取ってくれる存在である。大自然と生きるのは、今の便利さを捨てないといけない

から、かなりの覚悟がいる。なかなか都会の仕事を手放して移住する事は出来ないが、自分たちにもなにか出来る事から始めたいと思う。

それがやはり自分は身体と心の事だなあと思った。身体も身体の声を聴きながら使わないとすぐに駄目になる。無理して仕事をし、ストレスを溜めた分、感情に任せそのまま暴飲、暴食をすると、まさに原生林を伐採した如くバランスが崩れる。自分で自分の原生林を伐採しているのだなあと思う。これを立て直すのには、かなり時間がかかるよと思うのだが、人間は我が儘で治るのが当たり前だと思っているから質が悪い。

だからキチンと身体がどうしてもらいたいのかを聞いて、何を食べるのかを選択する。たまに駄目なものも付き合いで食べた事もするが、次の日に断食をしてリセットする。症状を診て症状を治すのではなく、根本を観る人になり、自分で自分を癒していく事を教える、自分自身のお医者様を増やすのが私の使命で、今私が出来る事なんだと思う。

ガイアシンフォニーの8番も「森は海の恋人」と言っていて、海が荒れているのは山の状態が悪いからだ、山の木を植える活動をされている方の映画を9月に観た。それは身体も一緒に、薬で症状を和らげて根本的には治っていないのに、治った気持ちでまた無理をする人間に警告を与えている様にも見えた。

木を見て森を見ず。しかも根本的なところには目を瞑りわざと見なくしている。そろそろこれは止めたほうが良いよ、大変な事になるよと警告音が鳴り響いている様にも思えた。

自然から貰い、自然に返す様な暮らしに少しでも戻る様に自分達の出来る事から努力したいと思う。

# 直会演芸会

H 27・12・23



南京玉すだれ 湯浅晴子・山崎基央



フラダンス 花の一座



花子Baby's 水島誠・照美



おもしろマジック  
且田容子と  
司会・中島武宣



津軽三味線・河内音頭  
江州音頭 花の一座



佐賀県の伝統芸能、仮面踊  
「面浮立」 原保代  
めんぶりゆう



日本舞踊「雨の五郎」  
永坂あづみ



歌「折切」他  
神人-kamihito-





## 佐渡で暮らして

新潟県佐渡市 平田 弘之  
(菅原園元職員)

平成2年3月に佐渡へ越してきて早くも25年が過ぎました。

何時でしたか、矢追日聖法主にお社に魂入れをお願いしたところ、「お前の家は順徳さんがでてるわ」と言われ、我が家の神棚には「順徳院大善神」という人格霊をお祀りしてありました。そこへ母の故郷である佐渡で事業をやらなにかという誘いがありました。

月次祭の時に法主様に佐渡行きのお伺いしましたら、「ええ話やないけ、そりゃ菅原園は辞めてもらったら困るが、あんたの人生を考えたらその方がええやろ。大丈夫やれるやろ。ただし行く前に準備だけはしっかりして行きや」と言われ覚悟しました。そんなことがあり、順徳上皇が22年間過ごされ、『日本書紀』神代の巻に佐渡州として登場する歴史ある佐渡に越して来たのです。

佐渡で民宿「桃華園」を開業してからたくさんの方たちが訪れて下さいました。その中でも特筆すべきは法主様御一行の訪問です。1991年(平成3年)6月25日、見田・高橋さん先導のもと、法主様・鈴月母さん、日元さんが来島されました。精力的に日蓮上人・順徳上皇関係の史跡を巡られ最後の日には、「佐渡でのお役目はすんだし、今日は観光でもしよか」とあちこち御案内したのが昨日のように思い出されます。我が家の子供たちも同行させて頂き貴重な体験となりました。日元さんもお元気で津島神社の急な小山を登ったりしました。

大倭会の故中西会長を始め會員の方々も来島されました。紫陽花邑の邑人も訪問されました。岸野さんが昇ちゃんと一緒に来られ楽しく過ごしたこともありました。また各施設の職員の方々、特に菅原園の寮母さんたちも来られました。住死者の親御さんたちにも来て頂けました。奈良の友人・知人。野草社関係の人々。緑のふるさと関係の人たち。数え上げればきりがありません。

佐渡、金北山の裾野に位置する桃華園は、神道関係・大本教関係・日蓮宗関係等様々な宗派の方が訪れて下さいました。そんな人々との顕・幽を交えた交流が大事なことなんでしょう。

また、桃華園で民宿以外にも活動しました。チエルノプイリの子供たちの保養里親運動・福島の子供たちの保養キャンプ・各種コンサート・写真展・映画会・フリーマーケット、一昨年は「第19回賑栄い塾」を佐渡で開催することができました。これらは実にたくさんの方々の協力の賜ものです。人と人との出会いの妙に感謝です。

妻の縁共々還暦を過ぎましたが、これからも何ができるか楽しみにしております。

## 紫陽花の花のいづく

平田 緑

「おまえは変わった子だね。人と人、人と物を繋ぐ仕事をするよ」と、四柱推命で運勢を調べていた父が言ったのは、私が10代の頃でした。その時はその意味が分かりませんでした。この頃少しづつ理解してきました。

それは、佐渡に来て民宿の仕事を生業としながら、人と人、人と自然、人と物等の「繋がり」の役目」をさせて頂いているのかなと感じる時です。そして、佐渡が人生の中で一番長くいる意味のある場所になりました。

大倭紫陽花邑の皆様にお会いしてから、限りある人間の身体の中で出来ることやそうでないことを少しずつ知りながら、日々の仕事をして暮らしております。ありがたいです。また、自分で選んでしている仕事も、それだけではないと気がつきます。

2015年は、佐渡や私にとって大切な人々のお別れがありました。

佐渡のお米が日本で一番美味しいと、佐渡に移住して無農薬米で天日干しの米を作り、またフードバンクを作った津田政明さんは、肝硬変により4月7日、59歳で旅立ちました。

佐渡の文弥人形の名手だった本間照代さんは、臍臓ガンにより6月11日、68歳で旅立ち。女性だけの文弥人形一座を作り、後輩を育てました。一昨年の佐渡の賑栄い塾では、ときわ館で美味しい料理を頂き、文弥人形を上演してくれました。

また、洞爺湖サミット晩さん会では、佐渡の金剛杉の写真が飾られました。それによって一躍佐渡を世界に知らしめた写真家であり、ネイチャーアクアリウム界の世界的カリスマでもあった天野尚さんが、8月4日、62歳で胃ガンにより旅立ち。

新潟の西蒲原の漆山にお住まいだった天野さんは、その2015年2月にはポルトガルのリスボン海洋水族館に40メートルの世界最大の水槽を作りました。日本では、すみだ水族館の中に天野さんの作った水草の水槽があり、二酸化炭素を水中に入れ自然界と同じような光合成により、水草も、魚たちもゆったりと泳いでいます。とても素敵です。すみだ水族館の水槽は、夜の1時から朝の8時迄、水草や魚の糞取り等のメンテナンスの為に、3人の会社の人たちが働いているそうです。

時は流れています。時の流れが速くても、私達は仲良く一緒に歩いて行きたいです。

## 大倭千一夜 (其の二十三)

昭和41(1966)年8月23日発行『大倭新聞』第23号より再録

## 狸さんの一騒動 (上)

法主 矢追 日聖 (満54歳)

## ——徒然なるままに心靈のくさぐさを喋る夜ばなし

## 靈的障害者

今晩はね、奇蹟と人が言うような、面白い靈的障害の話でしょう。といてこの種の病人が治ると思って沢山来られては困るんですが。治らないことも又沢山あるんですからね。この場合は即座に治った例であります……。靈的治療は私の本職でも使命でもありませんが、私によって治る場合もあるのですから、宗教の副産物のつもりで私は扱っているのです。反面、これが宗教的にも役立つこともあるんです。

話の順序を逆の方からすることにしましょう。昭和二十六年十二月二十一日でした。朝の八時、今井富蔵さん当時、大倭安宿苑苑長が息を切らして大本宮へ来られたんです。立腹のような興奮した顔でした。これはただごとでないと思えて聞くと、彼、開口一番、「あいつ、しょうがないことをしまして……。大倭の先生に合わす顔がない、敷居が高くてと言って、昨夜、泣きついてきたもんですから、気の済むまで怒鳴ってやったものの可哀想になりましたな、どうかお願いします」ということなんです。この訳というのはね。今井さんの隣村に戦争未亡人で、徳田トクノさん(四十歳、以下仮名)がいた。長男は宏(二十歳)、次男が満(十六歳)の三人家族で、農家でした。近所には親戚の人連が多かったので、その点は恵まれていたのですが、この母は、人生の希

望を長男にかけて勤勉に働いていたのです。

その宏さんが、ひよいとした動機で精神異状になって狂ったんです。背は高くないが、頑健な体の持主で気立てはやさしく、青年団では相撲の選手のようにでした。これが三年前のことです。

発病してからというもの、トクノさんは尽くせるだけのことはしたようです。病院にも世話になり、「ようきかはる」と噂を聞けば、遠近をとわず神詣でもやっただようですが、どれも靈験はなかったようですね。私が宏さんの話を聞いたのは、ひと月前の十一月十日、今井さん宅に参った時でした。みれば、狸霊が出てきたので、軽く彼にそのことを話しておいたんです。

## 狸さんを祀る

余談になりますが、この席へ椎木の浄蓮寺に住む沢口志な(三十六歳)という御婦人が来ましてね、何か小理屈を言っていたもんですが、運命のいたずらか、どんな風の吹回しかは存じませんが、それから二年たつて、この家族五人が一門に加わったのです。それが三年にして主人を亡くし、今は双葉館の主に納まるとはねエ……。当時思いもよらざりき、人の世の定めか……。曲がらぬまま伸びた足が結んだ縁ということですねエ。

話もとに戻りますが、宏さんが浄霊で簡単に治ったので、十二月の十日にその邪霊であった狸霊を、その家庭を守らすため鎮め祀りをしたので

す。社に祀ったからといっても、これは神様として祀るのでなく、言わば、盗人の守りに番犬を家族のように飼うのと似通った意味です。狸霊でも靈力においては人間以上のものを持たせていますからね。その能力を人間の喜びに使えば、狸霊もその功績によって向上するようになっていくのです。

病氣中のことだが、徳田の親族で、信者もかなりもっている「おがみ屋」さんが、一週間も水行をとって祈祷したが靈験がなかった。それを気にしている矢先に、宏さんが全快したと聞いたから驚いてかけつけたらしいんです。すると、棚にある新調のお社に目が付いた。彼の曰くはね、「狸なんか祀れば、又いつか障るから、これは祓って縁切りするものだ。わしがそれをやってやる」と言いながら祓いの祝詞を唱え扉を開けて、御靈箱を逆さまに立てた。と同時に宏さんが金切声を発し、「大倭の先生に叱られる……」という声を残して狂乱の状態に戻ったんですね。

力ではおさえることはできないし、かの行者は、経力や気合、息吹で鎮めようとするが益々猛る。夜になると、病人は食わず飲まずのまま寝床の中へもぐり込んだ。彼は一晩中、行者をなぶりものにしてからかったらしい。行者はしきりと九字を切る。彼の方では「われみたいな、あくか。そら頭じゃ、いや腹に居る。ああこちじゃ、そこじゃ」という風にね。行者は夜が明けるのを待って這々のいで逃げ帰ったようです。

あとで困り果てて今井さんに泣きついたという寸法だったんです。この件をもって使いにきたのが二十一日、私は今井さんの自転車の尻に乗ってかけつけた。すると仁王顔をして座っていた病人はニヤリと私の顔を見ると微笑して、もとの宏さんになったのです。(続く)

# あじさい日誌

12月12日 交流の家で午後、FIWC定例委員会。  
 12月13日 朝8時から大倭墓地の大掃除。引き続き9時から、邑人はじめ大倭会の有志の方々、FIWCの皆さん、プロの坂内造園さん達によって紫陽花邑の大掃除が行われました。  
 12月15日 大倭神宮月次祭。  
 12月22日 冬至。大倭の大晦日で、この日までに大倭神宮や紫陽花邑内各所の門松・注連縄などが整えられ、拜殿では日聖祭の準備も行われました。  
 12月23日 大倭72年元旦。午前10時、法主奥津城でのご挨拶。10時半から大本宮拜殿において日聖祭が行われました。  
 午後1時からは大倭会館において直会演芸会で楽しい2時間でした。5頁写真をご覧下さい。  
 日聖祭に、大倭会館に宿泊したりして遠方から参加の皆さんも多く、有志により夕食会のおもてなしもありました。  
 12月27日 午前10時から大倭神宮の大掃除。昼食のお弁当を挟んで午後1時半頃まで行われました。  
 12月28日 いつもは夜に行うところ午後2時半から、教務本庁で『おおやまと』編集会議。  
 12月29日 昇ちゃん深夜バスで神奈川県横須賀市の弟さん宅

へ帰省。青山法義・元子夫妻に近鉄奈良駅まで送ってもらいました。いつもはもっぱら『モウカエツテコナイ!』と言うところ、今回は幾つ泊つてと指折り数えることも……。  
 12月30日 午前9時から法主奥津城の下辺りで、正月用のお餅つきが行われました。今年も、27日から年末キャンプ中だったFIWCの若者達も参加。  
 12月31日 午後11時半から邑の若者達より1年間の「まがつみ」を祝い清めるため365回、拜殿の大太鼓が打ち鳴らされました。  
 1月1日 午後1時から紫陽花邑で、法主様の奥津城をはじめ守護霊各所にご挨拶めぐりをして、2時から大倭神宮で年始祭が行われました。  
 1月5日 午前11時から大倭拜殿において大倭安宿苑・大倭印刷・大倭殖産・大本宮職員の仕事始の会が開かれました。  
 昇ちゃんも無事戻って来ました。お年玉をどう使うかわくわくの余り、騒がしいほど元気が。今年は84歳の年男です。  
 1月6日 大倭神宮月次祭。いつもは邑倭の会の行われるところ、夕方6時から大倭会館で邑人や有縁の皆さん達が鍋を囲んで、新年会が開かれました。  
 1月10日 禊会。  
 大倭安宿苑では  
 12月24日 夜、奈良ロイヤルホテルで法人年末懇親会が行われました。  
 1月4日 法人新年祝賀会。  
 (菅原園)  
 12月31日 男女に分かれて年末紅白歌合戦を行い、各々十八番(おはこ)を唄いました。  
 1月6日 大倭神宮に希望者2名が初詣にいきました。  
 (須加宮祭)  
 1月1日 元旦祝賀会。午後からは大倭神宮へ初詣に行きました。  
 (長曾根祭)  
 12月17日(特養)誕生会で12名の方々のお祝い。内1名が白寿を迎えられました。  
 12月24日(タイ)クリスマス会。  
 クリスマスアレンジメント作りや職員のハンドベルの演奏、自作DVDの上映、職員手作りの巾着袋のプレゼント等、盛りだくさんでした。  
 (茂毛路園)  
 1月5日 新年の集い。昼食は

創作料理、お膳が自分の前に来るだけで「鍋美味しそうやね」「きれいやな」と驚いておられました。  
 (八重垣園)  
 1月1日 いいお天気で穏やかな新年を迎え食堂でのご挨拶を交わし、朝食はお雑煮、昼食・夕食はおせち料理を頂きました。

## 法主帰幽祭のご案内

日時 平成28年2月6日(火曜日)

●午後1時40分より法主様奥津城においてご挨拶をいたします。

●午後2時より大本宮拜殿においてお参り後、平成2年12月23日の降誕祭の映像記録を見ていただき、その後教長さんのお言葉をいただきます。

現身はよし朽つるとも永久に結ぶ心のかわるものかは

宗教法人 大倭教

## あんない

\*玉緒祭(大本宮)  
 2月3日(水) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。  
 玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じ謝するお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。  
 \*月次祭(大倭神宮)  
 2月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。  
 \*法主帰幽祭  
 2月9日(火) 上欄参照。  
 \*大倭会主催第565回祓会  
 2月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。  
 \*月次祭(大倭神宮)  
 2月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。  
 \*申孝祭と月次祭(大本宮)  
 2月23日(火) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拜殿にて月次祭が行われます。  
 申孝祭は、神武天皇が行った祭政一致の故事、鳥見山中の霊時を記念するお祭りです。  
 ヤマトの鳥見と九州の高千穂の武力による争いを、円満な国譲り、即ち安定した国の形として政権交代が完成したことを、神武天皇が感謝された記念日です。  
 詳しくは平成26年7・8月号の法主様の遺稿「大倭神宮伝承の紀」等をお読み下さい。